



續像
英雄

山石見英雄錄

五
輯

四

遠
2509
35-32



遠
2509
35-32

復讐言石見英雄録第五輯卷之四

南海 玉藻主人編次



京寓滞りて義行浪遊小耽居
處女を街て元青騙術を逞む

組前説可樂齋の種李が方才のひたる詞を難トて膝おし找め恣
いそんの最も委れぬ多拳勅を片ぞ怪みひるん。かれも愚心者が性
とく己を托て人は随ふと委れぬ。おん為の作廢り思しむん程を
も省先試み論じん。唐山漢の武帝の時蜀國益州に紀也。あ
神の名を碧鷄といひ。星は天鷄野雞の名ある如たの異之蟻蟀をも
天鷄といひ。おのこ沙雞とも樗鷄ともよび。莊子小蟻蟻を醜鷄といひ。這
們的虫あり。麩を辟鷄といひ。獸あり。まゝ菌を樹雞とも。鷄毒

復讐英雄録第五編卷之四

鳥頭あり 鷄頭へ芝あり。其他雞種伏鷄子をいふ東西も
皆這非情の草なり。性色は通じて這們を鷄の名あるのみ実を
ム屬ありぬ論あり。又鳳凰仙鶴あり及ぶものを靈鳥ありと
いふは什麼あり説めや類々を妙論を听しあひ給。と詰れば種李
らち含笑。偏見僻説一家の私論ふいと見。鄙語は那鷹は種
類の多かれは。とて冊八鷹ありもいふ。大さるる鷄より小なる鷄
ふより。鳥鷄鷄梟とを算へ。今も例に隨せし算へ。鷄鷄
あり楚辭九辯及び前漢書司馬相如が傳はる。その形鷄に似て
黄白色領長く喙赤しとあり。駱駝鷄の火雞あり高さ七尺俗に
を駱鳥とよぶ。洞冥記に滿刺伽國は火雞あり火を食ひ氣を吐く。
島夷ム卵を以て飲器とをいふ。這は雉の野鷄あり鷄鷄の山鷄

あり又鷄雉とも山雉とも號く。錦鷄あり又采鷄鷄鷄をいふ
の別名あり。鷄頭鷄の竹雞あり。杖は鷄の如く尾ゆく長し。ま
鷄鷄に似て小さく褐色ありて斑は赤し。生平竹林の向ふ居り蟻を
食ふ。水造りも栖む。性よく好て啼く。聲自ら泥滑々と呼ぶ
像ありとて唐山にて蜀人あれを鷄頭鷄と名く。は色は東坡先生の
詩に泥深厭聽鷄頭鷄と云ひ。その春晚の詩にも竹鷄啼處兩聲
交なりとあり。又皇國にて水鷄といふ。秋雞あり。夏至の後より夜鳴
て秋後ふかりて止む。鷄雉に似て大に毛色黄黒ありて褐あり。
首は毛角あり冠あり。性よくて儕黨を愛し。倘他鳥に侵さるるの
あはば直ちふ赴て極めてム敵と闘ひ。死せれども歎けり。殺鳥なれば。
古へ唐山周末なる戦國の時趙の武靈王鷄冠を製して武士を表せり。

後漢書與服志も。虎黃皆鶡冠をといつ。這は尾を用ひ武臣の首を飾王あり。と顔師古が註みり。後と隱士も鶡冠を。名利を心撓まづ。とよく勇退するの義を取居あり。這は餘吐。鶡冠を。あり一名を真珠鶡とよぶ。又は杉鶡あり形竹鶡の像く頭上。冠あり。垂纒の像を。平生を杉樹の上に居る。鶡冠の頂に金色あり。ては。嘴紅あり形鶡類。色は鶡の若し。三月三日前に去て。九月九日前に来る。群飛て雷の如し。又は皇國人の雷をとよぶ。或は鶡の字を假借用は這鳥の松難を加賀國白山。餘も深山。松あり。好て松を栖み松子を食ふ。今俗の窓の上。壁に鶡の像を画して。帖り。荒神松と稱へて松を供さるに。那鶡も雷を伏せるをとよぶ。一て。火を鎮席の意を。松鶡を画して。後終は錯りて。一

博士の言ふ。然れ。這は。林栖野處の物或皇國。高見ぬりあり。正可ふ鶡の種類。鶡あり。儉鶡あり。烏骨鶡あり。り鶡あり。李時珍が説ふ。朝鮮の長尾鶡の尾の長さ三四尺といふ。南越の長鳴鶡を。昼夜啼く。南海の石鶡。潮至は時。鳴く。荒雞といふを。晋書祖狄が傳ふ。出づ。又は下に靈鳥あり。といふは。失口。五德のも。一は。首に冠を戴く。文あり。足に距あり。武あり。歌若。在り。闘ふ。勇あり。食を見て。相呼。仁あり。夜を守り。時を矢の信之。這は。韓詩外傳。載る。所より。田饒が魚の哀公。二告。辭あり。遮莫。其の德の時を。矢の一事。りて。靈と。一

字書しよしょふの鶏けいのけい稽けいあり。能よく時ときを稽けいるの義よあり。まま周禮しゆらいふの大宗伯たいそうはくの職しやくをもつての執しやくと作やり諸臣しよしんを等とするふの工こう高かうの鶏けいを執しやくとする。其時そのときを守りて動ふくふ取とりといひ。又また幽冥録ゆうめいらくに記きせる。晉しんの兗州刺史けんしゆしと宋處宗そうぢゆうしゆうが牕間しやうかんに畜置ちくしは長鳴雞ちやうめいけいの後のちより人語ひとごを作やりて處宗ぢゆうしゆうと談論だんろんするの極きむの致ちあり。處宗ぢゆうしゆう以もて因よて玄学げんがく大だいなる進しんみのとや。在下そのが昨夜よるべの夢中ゆめちゆうの趣おもむをな那處宗なぢゆうしゆうが現あらはれる。鷄けいと談だんせりの係けいて謝安しゃあんが夢ゆめに白鷄はくけいをみるの異ことありべし。這この與まり乘まりて不ふ覺かくもも先生せんせいに對むひ博士はくし態たいなる長談ちやうだん多た辯べんの太たいく憚はげりあるの。俺おれ失言しつげんを怪あやまれしとを答こたへるの由よしを言ひ散ちりてはり。無益むえきの論ろんの固こり。在下そのが這里こゝより直ちかふ山國さんこく莊しやうへ赴おもむけては緯いとの容かを張ひり。憑た憑たて思おもふの那鷄なけいの靈雞れいけいをみればは變まりては那地なぢには緯いとの左ひだり

證しやうもも形かたちづくた要えいありべけい先生せんせいに請こうせう推おし考こうへり移うつりて欲ほむの這この証しやう何なにふと意い衰せをしては談だんせるべし可樂齋からざいの听きひを完尔くわんじともち笑わらみす。嗚呼あゝ文事ぶんじあるのゆゆに武事ぶじあり。ともかんかんをいひのすす。武城ぶじやうの雞けいふのああるの秘ひども。前まへ言ごの聊りやうもも力ちからをいれる戯あそぶの深ふかくも心こころをいちいちと既すでには才子さいしの論辨ろんべんをいちいちと選えんをああるのななれる。五老ごらうが寡聞くわぶん管見くわんけんありて鷄けいの上のうへに於おきて海うみにはつつたつ緯いと何なにのの。飼かひ鳥とりの人ひとには交かをいちいちと報はつつすの例れいの听き得えるの緯いとももあり。唐たうの天寶てんぽう中ちゆうに長ちやう安あんの豪民かうみんに揚崇義やうしゆうぎといふのありし妻つまあるの劉氏りうし隣舍りんしやの李り弁べんと密ひそ通とふの侶りよに計けいすの崇義しゆうぎを殺ころす。屍骸ししかいをいちいちと涸井こくせいの中ちゆうに埋うめては後のちにいちいちと出いでる容さまふのりて他人たにんに殺ころされしやと詐いつはりすのば檢吏けんし來きりし乳ちちをいちいちと乳ちちをいちいちと開ひきつける鸚鵡あひむありて有司ゆうしに崇義しゆうぎを殺ころされし妝まを告つげ

れ。牧野殿衛義行といふ武士あり。千遠祖ハ山鳥の尾張國より出り。
あそる。斯波氏の支流あり。斯波ハ細川畠山と同く。足利の氏族より。室
ま町殿京都の三官領の隨一あり。權臣の同宗あるを以て。牧野と云。這丹波
く國山國莊あり。將軍家政所領の眼代補せられて。世々這地方小佐小
けけり。世々山國莊ハ桑田郡の北邊小塩井戸寺山比賀江達村中江
お大野下邨鳥居塔村をどり。邑里々々。開田數二千百十四町の地方
ああり。小鳥居里ハ眼代廳ありて。牧野氏開政を司り。貢税を系於將軍
け處へ晋上して。國守を護の下風ハ勝を屈せける。家風久く盛なり。小
とのそよそ。そのそよ。司馬介義則がや。世より。開船も年壯ハ
あ其時より。職事を歎ひ病推託けて。弟ある左馬二郎義順。小家を
あ諱り。ハム身ハ別ハ栖宅を構へ。けり。左馬二郎も友于の道ハ暗く私

ら。後ハ養番と稱し推辭ぬまま。義行あれを強てひらか。俺
あハ病身羸弱みて公務堪ばん身俺替て家督さハ俺ハ心
あ靜ハ性を養ひ保護せば或ハ壯健の船とあらばも。亦者壽の人
とある子を得べ。有徳ハムハ比自ハん為の脱あり。其ハ當俺船勝を
ののみあ何らばんハん天質俺ハ奮立勝り。沈勇りて思ふあ
り。途バ公ハ忠を竭し。私ハ家尊大人の勞ハ代りハるせ。又
あの不肖の兄を安堵せん。孝悌全計ハ小節ハ拘りてかど
推辭せ。あとかと然せ。義順ハ沈吟て然思ハ酒を飲
も亦一卷の情願あり。あら大人も聞會ハハ秘。酒を備大哥り
替りて家ハ當りハ兄も心安く船を養ハハんハ今ハあれ



改めて健ふをらせぬべし。信てゆく生せぬ子息あはべ一個をば
 在下賜ふべし。然るを命は後ひをらんとのひれば父の司馬介義
 則ハ喜氣ふ板齒脱くる口を用たてうち笑は。皺み額を搔拍て
 左馬二は汝が即今の情状に未生の侄を以て俗ふは順養嗣ふせま
 く欲む。友愛情義の眞実あるを。誰が諾りぬればあんハ親甲斐
 ふ這義則が保ふま。屋よ原清汝が懐胎を遂んとするは皆請旨
 にしも随せよと慈愛の理會ハ義行もいそ命は恃るべたと盟ふ
 て并議ふ降しける。這ハ二十有八年の往昔十年の緯中て兄原清義
 仍ハ二十四歳左馬二郎義順を中さうう嫩た十七歳の時候かりき次
 年ハ波多野家旗下の勇士ある。八百里の城主畑牛之丞守能が妹ハ
 呉竹雪松とよめる。年ハ二八と三五ある。二名の處女あるを司馬介請

ありて義親ハ義順兄弟ハ妻せける。有右而二年許ふして父義
 則ハ心もあはた矢猛ふも。腰に梓の弓を張るまで年居多勒ハ
 有係ハ丹波の眼代とて。齡ものほる七十の老の坂を。踰る後
 病てふも率りぬ左馬二郎義順ハ六年既ハ父ハ讓を交けて。
 家を継しる。京ハ入至て室町殿ハ参上。公方ハ拜謁しりける。
 登時ハ將軍大納言義晴卿世子義藤朝臣。共侶ハ
 義順ハ風骨を尙して。一器量あるべた少者後憑志あ。思ハ刀はく旨
 宣ひけるが。馳て義順を左馬權少允ふるされて。山國莊公方御領
 の眼代世を違ひ任し。御教書を下賜りりける。又原清義
 仍ハ妻の呉竹りる侶ふる居の里より。此ハ離れ。比賀江の村ハ逆
 て構え。新居宅ハ殺す。牧野氏りこより。赤富栄娘ハ奴婢

んどもも 隠居から げりけりて 退隱の士 養ひ 時々 系師 遊びて
 山名 勝地を 探る ほど 亦 始に 似て 稍 徒ら あり けり 尚
 世勢を 避けて 釣を 垂れ 網を 弄び 溪川 漢獵を たり 樂と せり
 述る 小義 初が 妻 吳竹の 郷に 這里に 移り あり 十年 経る 候
 卒 亥 歳 十年 小 開 ぬの 齡も 二十 八と あり 初め 娠り ぬれ
 小 義 初が 歎 び けり あり 鳥居の 眼代 左馬 権 允 義 順 女 嫂の 年を
 へ 經る 妊り ぬれ 日 屬より 神 祈り 先祖の 靈 亦 訴 へ 爾 赤
 心の 届 ぬれ 歎 び ぬれ 月 満て 捌 月の上 旬に 生れ 玉
 を 助く 許 あり 女子 あり 大 家 東 西 是 ぬ 心地 ぬれ 躬 へ
 名を 新月 と 呼 ぶ 亦 係 ぐ ちも 續 けて 吳 竹の 次 年 子 房 子 を
 安ら ぬ 生 ぬれ 乳 字を 源 二 郎 と 稱 へ たり 同 胞 侶 亦 あり

多く 生 育 僅 小 性 怜 惻 孝 順 之 け ば 二 親の 寵 愛 けり ぬれ
 の 叔 父 義 順の 縁 へ 約 けり 緯 も 阿 ぬ 特 小 源 二 郎を 愛 喜 び て
 髪 措 袴 着 ぬれ 涙 祝 ぬ 勿 論 生 平 小 玩 弄の 東 西 ぬれ ぬれ
 細 意 を 用 じ ぬれ 妻の 雪 松も 開 躬 嗣 育 あり 程 弱
 女 子 の 習 態 あり 幼 孩 を 愛 覆 性 あり 况 ても 俺 姊 吳 竹
 が 生 る 子 ぬれ 姪 女 も 姪 女 も 差別 なく 偏 向 ぬれ 兒 の 縁 けり
 亦 小 源 二 郎 男 女 兩 名 の 幼 童 も 小 父 懐 け 嬌 を 慕 ぬれ 所
 生 双 親 亦 現 も 血 脉 の 親 みの 丹 誠 然 ぬれ ぬれ ぬれ
 迹 陰 陽 小 関 成 あり 雁 と 燕 の 往 來 義 番 の 春 秋 を 送 り 述
 へ 新 月 年 十 二 源 二 郎 の 十一 歳 の 冬 初 生 ぬれ 母 親 あり
 吳 竹の 齡も 四十 三 不 足 ぬれ 不 圓も 風 邪の 心 地 と 枕 兒 亦 就 ち

伏よる。婿竹の癩はけりゆ。霜枯の葉尾の露の命と。悦も
 消て亡る。殿衛を始見。新月源二郎が哀憐れみおして。義
 松夫妻の悲傷も。由と尋方もかりり。光系を写録し。有
 鎖細さふ。省然ぬ。む。看官より。精ま。冗話休題。却説。牧野
 辰清。義行。尚老くれも。せて。妻を。密ひ。ほ。後。継室を。妻り
 之。徳。通。心。人。も。あり。然。余。家。の。忘。れ。難。は。故。妻。の。遺
 孤の。見。息。們。ふ。意。を。介。は。せん。も。役。を。思。ひ。ふ。れ。絶。て。開。頭。に。掛
 念。せ。ば。良。月。屬。を。經。ね。ど。も。歳。も。幼。を。暮。て。翌。を。心。永。録。上。年。の
 春。を。ぞ。り。現。去。者。の。目。下。跡。一。の。如。小。早。晚。小。寢。覚。不。樂。一
 く。思。ふ。ぞ。有。繫。ム。とい。ひ。を。ふ。い。を。暗。々。地。に。狂。多。形。意。馬。を。繫
 ぐ。登。丸。鞆。も。欲。得。と。思。ふ。る。べ。し。有。右。而。其。后。二。月。の。半。小。義。行。を

一。兩。個。の。伴。當。を。持。て。系。よ。お。た。東。山。四。下。ま。う。那。貸。座。敷。と。う。い。ふ
 め。れ。を。俄。て。久。ま。く。留。り。遊。ぶ。も。專。圍。碁。を。好。む。ハ。ム。歌。を。お。る
 人。を。訪。も。ま。訪。も。ま。て。う。ち。奥。に。ぬ。る。中。も。四。條。堀。川。の。頭。に。柳。の
 阿。片。元。青。と。の。醫。師。も。這。技。を。嗜。み。て。感。時。の。辰。清。が。就。居。小。判。り
 或。時。の。己。が。家。小。判。り。管。待。親。も。み。た。係。這。元。青。と。の。時。候。の。管。領。の
 保。三。好。家。の。權。臣。も。松。永。彈。正。忠。久。秀。が。郎。は。拜。趨。志。成。る。世。の。い。ふ。那
 門。下。醫。師。あり。一。の。松。永。の。月。俸。を。取。せ。ぬ。性。固。り。陽。子。飾。り。く
 外。物。を。繕。ひ。陰。に。人。買。り。て。飽。と。お。た。便。安。阿。諛。の。小。人。を。れ。ば。這。牧
 野。丹。波。も。て。公。方。家。政。所。御。領。の。眼。代。さ。る。人。の。見。り。て。富。も。榮。え。一
 人。を。れ。ば。親。み。て。損。を。終。ふ。ハ。奇。貨。と。ある。東。西。を。れ。と。情。地。不。計。較
 む。心。より。等。閑。お。る。は。り。の。一。け。り。有。一。日。殿。衛。を。真。葛。原。の。頭。を。就

居を出て阿片元青を訪ひて。侶基を圍みし。當下他客もあく。
 主客後局の輸贏。鬪り。終ハ四表八表話説。小程。一。同。元
 青ハ縁て準備せ。湯羹酒餚を薦。侍婢小爵を執せて。湯
 盃を巡る。時。次。序。り。乾木敬四といふ。塾生が違く来り。本坊正
 の内室方。僅卒病。困塞。うれて。何。即便先生の来臨を請。真之
 といふ。元青。園。顯。を拵て。卒病。を。治。術。は。同。隙。と。る。べ。も。あ。し。う
 移。ど。佳客を。園。た。一。妻も中座の。無。務。ある。過。刻。の。敷。棋。も。那。何。小
 止。か。へ。最。打。惜。し。山。野。大。人。願。ひ。小。雲。時。那。們。を。か。ん。陪。堂。と。り。か。ひ
 て。等。甘。あ。ひ。杯。小。哥。ハ。那。病。架。へ。走。一。走。ハ。快。行。て。快。歸。り。今。一。局。の。勝。負
 を。受。し。侍。ん。とい。ひ。の。記。て。遠。く。衣。脱。更。て。出。り。行。く。義。行。を
 心。お。す。ば。も。敬。四。と。侍。婢。ハ。管。待。れ。て。主。人。の。歸。名。を。等。や。と。小。卒。心
 腹。運。不。痛。み。て。禁。難。く。心。地。死。ぐ。男。小。許。の。苦。痛。ハ。態。ハ。兩。個。の。俣
 此。違。遠。て。敬。四。ハ。急。ぎ。茶。厨。の。抽。匣。を。搜。索。め。て。九。散。園。丹。那。這。と
 かく。茶。を。食。出。て。薦。れ。ども。速。ハ。効。も。見。え。ば。れ。ば。伴。當。子。舎。在
 一。牧。野。が。伴。當。も。這。里。小。来。り。て。保。護。ま。の。玄。関。を。鎖。り。今。一。個。の
 塾。生。天。低。勘。三。急。だ。元。青。を。呼。も。返。さん。と。走。り。行。く。雲。時。あり
 て。歸。り。来。り。那。里。の。病。架。も。緯。煩。重。く。て。冗。雜。の。最。中。な。れ。ば。先。生。ハ
 逢。ふ。と。い。は。う。之。何。言。も。い。で。ム。後。歸。ま。り。と。乾。木。敬。四。の。氣。味。ハ。似
 ぞ。胡。椒。を。圓。圖。吞。ま。う。け。ん。有。理。天。低。が。ま。ま。み。の。甲。斐。文。を。使。り
 一。家。鬼。打。擇。ま。る。を。是。も。亦。い。上。甲。斐。あ。り。と。や。思。ひ。ん。奥。あ。り。と。紅。粉
 舎。の。亮。隔。を。推。開。た。深。と。薰。り。来。る。寶。真。薰。の。馨。香。罩。は。麻。絳。梅。織
 の。陸。尺。袖。の。衣。着。は。一。個。の。處。女。の。衣。婉。約。ハ。鴈。園。て。ん。え。ん。と。あ。が。

居を出て阿片元青を訪ひて。侶基を圍みし。當下他客もあく。
 主客後局の輸贏。鬪り。終ハ四表八表話説。小程。一。同。元
 青ハ縁て準備せ。湯羹酒餚を薦。侍婢小爵を執せて。湯
 盃を巡る。時。次。序。り。乾木敬四といふ。塾生が違く来り。本坊正
 の内室方。僅卒病。困塞。うれて。何。即便先生の来臨を請。真之
 といふ。元青。園。顯。を拵て。卒病。を。治。術。は。同。隙。と。る。べ。も。あ。し。う
 移。ど。佳客を。園。た。一。妻も中座の。無。務。ある。過。刻。の。敷。棋。も。那。何。小
 止。か。へ。最。打。惜。し。山。野。大。人。願。ひ。小。雲。時。那。們。を。か。ん。陪。堂。と。り。か。ひ
 て。等。甘。あ。ひ。杯。小。哥。ハ。那。病。架。へ。走。一。走。ハ。快。行。て。快。歸。り。今。一。局。の。勝。負
 を。受。し。侍。ん。とい。ひ。の。記。て。遠。く。衣。脱。更。て。出。り。行。く。義。行。を
 心。お。す。ば。も。敬。四。と。侍。婢。ハ。管。待。れ。て。主。人。の。歸。名。を。等。や。と。小。卒。心
 腹。運。不。痛。み。て。禁。難。く。心。地。死。ぐ。男。小。許。の。苦。痛。ハ。態。ハ。兩。個。の。俣
 此。違。遠。て。敬。四。ハ。急。ぎ。茶。厨。の。抽。匣。を。搜。索。め。て。九。散。園。丹。那。這。と
 かく。茶。を。食。出。て。薦。れ。ども。速。ハ。効。も。見。え。ば。れ。ば。伴。當。子。舎。在
 一。牧。野。が。伴。當。も。這。里。小。来。り。て。保。護。ま。の。玄。関。を。鎖。り。今。一。個。の
 塾。生。天。低。勘。三。急。だ。元。青。を。呼。も。返。さん。と。走。り。行。く。雲。時。あり
 て。歸。り。来。り。那。里。の。病。架。も。緯。煩。重。く。て。冗。雜。の。最。中。な。れ。ば。先。生。ハ
 逢。ふ。と。い。は。う。之。何。言。も。い。で。ム。後。歸。ま。り。と。乾。木。敬。四。の。氣。味。ハ。似
 ぞ。胡。椒。を。圓。圖。吞。ま。う。け。ん。有。理。天。低。が。ま。ま。み。の。甲。斐。文。を。使。り
 一。家。鬼。打。擇。ま。る。を。是。も。亦。い。上。甲。斐。あ。り。と。や。思。ひ。ん。奥。あ。り。と。紅。粉
 舎。の。亮。隔。を。推。開。た。深。と。薰。り。来。る。寶。真。薰。の。馨。香。罩。は。麻。絳。梅。織
 の。陸。尺。袖。の。衣。着。は。一。個。の。處。女。の。衣。婉。約。ハ。鴈。園。て。ん。え。ん。と。あ。が。

徐やうふ出まうて。殿湯が傍ふけり。おはす。見女を主人の小姐と作り。
 刀林を丹波の肉食ふく。山産する。近江都ふもあれども。旅宿
 られどや。心恥した人をも東西も医した。酒が宿所まで。猛ふ任る。おん
 病はあそ使わく。思ひぬ。爺々も同かく。帰る。喃々おん心強
 く思ふ。金傷をいふや。内産する。馳て。瘡り。けんと。説慰は先
 て。精悍まも。看護ける。ふ。義弘を。僅に。領た。謝する。の。口。管。呻
 吟て。在る。べ。那。慶。女。の。快。く。おん。湯。液。を。進。り。せん。と。敬。四。云。々。告。示。
 了。速ふ。西。三。點。を。調。劑。させ。ん。を。養。娘。と。指。揮。ま。て。眼。前。小。煎。火。の。像
 と。い。ふ。小。煎。の。四。碗。と。錦。子。焼。の。大。煎。中。なる。蓋。東。西。は。装。分。させ。白。き。蓮
 の。花。う。も。り。ん。許。ある。帝。子。小。載。て。ま。る。湯。衆。を。吹。冷。し。く。喫。試。みる。四
 碗。を。や。と。ら。傍。に。錯。て。蓋。東。西。を。子。づ。ら。茶。托。より。ち。載。る。登。り。刀。林

然もぞ熱くいひ。快々喫せむ。と。近く居りて。薦めたる。某
 四碗の錦子の錦ふ花を添よ。る。百の媚阿も。子。弱。女。が。松。に。被。れ
 は。最。浪。の。色。も。由。縁。の。端。も。も。麻。衣。あ。わ。る。青。柳。れ。く。正。首。ふ。り。の
 せ。い。情。も。深。く。見。え。ま。ら。り。

言を巧みして。嬖妾阿主を惑はせ

約を果して。小父猶子を養ふ

義仍も未通女が。看病ふ力を得て。湯液を飲回す。一霎時あり
 ず。頼不瀧。廁へ。ぬ。た。し。六。肚。痛。ハ。稍。和。緩。り。て。左。右。を。問。ふ。違。う。像。ふ
 全く瘡り了ら。衰へ。備。れ。て。分。違。の。人。ふ。看。病。の。教。を。お。給。の。こ。
 蒼蒼と。う。一。款。色。も。移。踏。小。復。ね。る。当。下。主。人。の。帰。り。来。さ。く。始。ま。う。の
 縁由を。叮。々。り。ち。駭。然。先。履。湯。ふ。對。して。恙。ね。り。し。款。を。漬。ま。り。并

船の帰宅の晩なり。由を信説て且いひける中。信直せば我兒を養ふ
 白痴と思されんが。這女兒般若瀑名。洒落が極実の只孤思ふして母を
 蝨く死に付るぬまば。父耶親育て多人並々ゆかりこれ。と後來人より
 後指をられやせん。と心を湯して教もきぬぬ。甲斐受もや絲竹歌舞の
 技をそらう。日属祝り。听りも。家塾師心も倒ぬ。と彼て後方
 る。教回勤三を顔ら。他们も勝り付りと鼻着蝨して説誇りる。
 卑陋の本性情を習う。奮來不毛の禿鬚茶鐘み似るるを撥開て
 拮擗の若揺り。呵々とうち笑ひしが。又義仍ふうち對ひく。おん惱を
 癒りぬとも。後の將息肝要なり。今宵ハ腌臢とも俺宿み一宿まぬ
 へ。おん氣力今く復して。明日帰らせぬとも。おん僑居のゆかれが怪い
 あら。何々と。處女岩瀑共侶は只管は留先りを義仍の厚く

謝びはえさ。氣力も今の平生のおとありぬ。僑居がくも義直せる僕
 ふ等不樂られて吐きせり。日や暮れを暇稟せ。連ふ
 推辞て。席を起す。これ元青の唇々歩む。官らら。然るも
 酷くを獲る。酒が後輪りて送らせ。せん。逼て。遠來の拙者
 小隨せ。といひも。敬四甚三を走らせ。蚤轎夫們を央ひ来て。
 推辞む。殿傷を偏向。鏡も薦めてうち載せる。真昔原へ送らせ。これ
 ば義仍も元青が厚情を。貳思ひ。詰朝は。妻般の人情。と。隷奴は
 持せ元青。許遣りて。昨日の謝を。ん。述べせ。る。人。持候。甲某中。將殿
 と呼れ。あ。搦紳家。隷士。在。田。典。物。利。高。い。者。何。り。遠。亦。原。浦。が
 甚。敵。ふ。して。元。青。も。面。善。兎。る。為。が。有。一。日。不。意。も。生。昔。原。小。訪。來
 一。何。ふ。義。仍。も。朋。欲。た。附。け。け。い。這。も。典。物。ぬ。一。よ。も。訪。せ。ぬ。し。



義行と奇貨として
阿片元青
愛女と高更弄に

牧野との名

宣
岩と死
計
騎百万兵
怨婦兩行淚

元青

あまの馬三

こころみ



あまの馬三

復讐英雄金五郎巻二四

あまの馬三

と直に使家へ送へ容れ茶を京川菓子と薦めてうち譚ふ話次ふ
 途層堀川の元青許も。如此々あり。あつて徳て産を吹くま
 似されども。乃日々餘寒もいま尚去り放後。も要性を主し。く
 漫然とせ。垂籠ての。在し。以て貴宅へも疎漏はり。ぬと倍説る
 を典物推察あて。在下あそめん。あはる病あり。さも久くあるまで。知ら
 て。過す。衆の。りを。どの。同ふ。次房より。牧野が。若黨が。果子の。折櫃
 様。御製する。三四箇の。管と。一巻の。草苧を。眼前。途く。按排。べ。戸川。降し
 跪。た。て。主。朝。ひ。這。の。柱。田。さ。ぬ。の。かん。齋。ふ。いと。稟。し。な。れ。ば。義。仍。の。典。物。ふ
 對。ひ。て。種。々。の。祝。あ。る。痛。み。入。て。侍。し。つ。た。お。田。の。誇。貌。ふ。久。く。不。来。せ。し
 國。昂。さ。ふ。什。麼。と。が。多。倍。説。種。ふ。と。思。ふ。許。み。齋。する。野。人。の。献。芹。も。て。
 這。る。の。い。那。金。花。さ。く。陸。奥。の。乾。海。蔘。あり。這。の。八。雲。さ。の。出。雲。の。十六。嶋

と。い。ふ。地。方。ふ。出。る。を。り。名。呼。海。昔。ふ。侍。り。這。の。管。の。參。議。も。愛
 せ。ひ。ん。八。十。嶋。遠。た。隱。岐。鯉。魚。と。這。る。の。小。川。北。鷺。不。知。と。い。ふ
 寸。鱗。の。身。乾。と。春。筍。なり。個。兩。種。の。都。下。の。産。物。得。難。く。も。何。し。秘。と。
 開。他。の。東。西。の。風。味。を。格。別。何。も。好。事。の。驕。饌。不。入。る。遠。國。の。名。産。珍
 味。ある。を。昨。日。あ。る。方。より。我。仕。な。れ。申。將。の。相。公。ふ。進。獻。せ。し。と。下。官
 も。分。ち。下。し。れ。拜。戴。の。三。種。を。も。僅。ふ。兩。種。副。て。今。日。の。執。費。と。し。て。一
 侍。と。辭。多。く。て。あ。る。鮮。た。あ。れ。や。実。小。徑。落。の。人。情。と。い。は。れ。て。は。ほ。ほ。と。笑。て
 儀。約。の。那。若。黨。ふ。盃。酒。の。準。備。せ。し。と。吩咐。て。件。の。種。々。を。庖。福。の。方。へ。持
 て。退。ら。せ。る。を。典。物。や。屋。と。呼。留。ま。て。和。主。は。憑。み。ま。あ。る。を。俺。伴。當
 の。僕。ふ。ら。兵。子。今。を。要。ち。な。れ。ば。介。意。な。く。快。く。返。り。し。と。侍。え。し。れ。と。い。ふ
 足。け。る。い。央。ひ。僕。の。名。あ。る。を。途。程。小。辰。湯。典。物。向。三。局。の。棋。を。囲

了て折もよく庖厨より運び出せし盃盤は互ふ父の眉をのべ献つ剛
れつ微酔ふ一霎時江湖上の説話して多き典物猛々膝を找めて喃
殿衛ぬー這の最も當面より率命る商量をれども交友の誠を
竭せまふ。至礼之と思われんも宵に稟試みん。かん月の本今年令室
を表ひぬふより。今尚継室を娶りぬべと听り。ムい仔細も由度見え
然れ人よ不時の病患あり。ム他よ緊要の緯あるん附幫助と做い
眞実の親み厚た妻妾ありて外なき。非如譜箒恩顧ありとも。後
使の奴婢們が恚りてム情愛恩義の親切あるふ及ぶた任じむと
側室を取りぬ有然バ利高が媒者て進んた處女ありといひ。体
ゆも。義仍、うち會笑て。這を和殿が篤く友を思ひ。志の親切あるを。
卑ろろく听侍ん。述まど在下の亡妻の遺孤ある。男女兩名の幼童們

さあるふ後妻を娶りぬ。他們もよく介意なく。才左馬允夫
妻が思ひん。子ども影護かり。と推辞む典物領き。ム故ふ去を利高が
妾を進めぬ。れ正室を取る。の緯公然ふして煩重け。小妻を圍り
侍婢をれ。輕易くて詐る爲許介意せん。叔後未開勤心仕態をえ
て。推辞して継室と做も。主人の隨意あり。公武の諸家。例妻あり。
壮年血氣の男子。好色の評。小落免老の境。入身。此久後
起臥の幫助。此與よ求る侍妾を。何人。又憚。ゆる。いと緯。り。あ。け。小説
破れ。い。義。仍。有。係。ム。意。を。記。ふ。阿。ろ。後。む。稍。く。ふ。悟。り。る。面。色。を。て。高。橋
始。愚。朦。を。醒。して。尊。ふ。昨。涙。を。知。る。う。ハ。什。麼。も。示。教。し。陸。ま。べ。い。と
い。ふ。又。枉。田。を。意。氣。揚。々。と。て。眉。を。ぬ。在。下。が。稟。を。辭。も。幸。小。捨。ら
き。ば。し。て。飲。び。侍。り。述。を。利。高。が。媒。者。て。後。湯。ぬ。い。進。ら。せ。ん。と。思。ふ。女

い別人形も代郎ち阿片元青が女児岩瀑あり。と听ひ呆々義行ハ這
 の典物ぬ一戯をむ。宣ひそ俺齡ハ四十ハ六を加うらふ俺女児もいふ
 登元少女ハ相恋しから後と听ひ果はむ利高ハ頭を左り右り小掉る。
 吾然ふ何う代那女児ハ確如ふ齡ハ二十あるべし。半分強も年紀不葉の
 夫妻ハ世ふり少からむ。期てや妻を春秋留をりて要とそかれ。般岩瀑
 年ふハ倍て大人使する萬ハ心怜惻し。曩も俺仕へなむ相公の姫
 へ侍一侍女が故ありて猛ハ暇をぬりしはとふハ代ふ人を央とせむひ
 耐ふ在下元青ハ識り。那女児をよき義姪ハ做て周年餘も館の姫
 侍せし。よは仕へなむてよ後河姫ハの御心ハ稱りね絆もす。ふは信
 派好情もあふ在下かれむ説誘んハ父女とも否とハいハ。恁許の才女
 なれども。元青ハ平生ハ業を継べた。男児ハ未索むれども。女児ハ家ハ

ありても憑げおくれ。那里おれ縁ハ隨せてるべしといハ。和君俺が
 諫をい捨ぬむむ好も牙も利高ハ委任ハひ孫。と己獨ガ團圓で説
 誘られ義行ハ岩瀑ハ傍の艶々志ハ人知らハ心動き。耐ありなれば。
 今典物が理り像せし。恁思ハ愈酔成が如く春情の燃ハ火ハ乾け
 薪ハ然む。不竭るハ速た命ハ辨くよ。もそく笑片向て左も右もよ
 此計ハひひのせと。苦ハ憑みゆえ。尚も餘談ハ時を移る典物ハ
 他日を契りて歸り。殿后那首這頭ハ四五番往回して。終ハ高
 量ハ一條敷正して。元青ハ女子を以て義初ハ妾と。肆月の上旬ハ
 真葛原の僑居ハ送る。安ふり。這皆始より元青ハ計較ハ。牧
 野ハ家の富るを以て。只麼これハ副馴ハ久後心安うりと思ふ。争何
 女を團圓ハせん。と生平ハム便點を求め。郷ハ戻湯を欵待て。酒を薦

けり。時辰湯が猛り吐の痛みし。級岩瀑かむを看病の乾木敬四くわんきんごふ
 教示して。ヒを執せし劑ゆき。義仍が痛苦を極むく愈せし。周しゅう
 小女兒を銜んと逆てより。那父女が牒し合せし情由を發く看官の
 猜多ぬべし。又那狂田典物も。利不敏くして。義は跡く。廉恥を知り
 ぬ。白徒なれば。元妻小憑せられて。度波女も異なり。奴醜態を羞とも思
 け。那山岩瀑の太極天文十五年。ふ生れし女子なれば。今年このとし 永祿六年えいりく六年
 十八歳ふあるを。然てい俗は忌むといふ。丙午の本命あるう。ふ年齢
 弱きやど。義仍が相恋し。かづと。あつとも。みべし。と逆て。張弓し。あつを
 れ。バ。二十歳ちうといひ。誘詐し。信し。七萬ふ提擲し。元青より。氷人
 保人二役兼帯の辛苦錢を貪う。又辰湯あり。許多の折乾を。ぞ
 のり。り。途む元青が只獨る。未通女を。ば。年庚も。相恋し。死人の妻

と。ふ。做で。学。こ。に。艱。夫の。妻。ふ。せ。し。ハ。絶て。人。の。親。と。心。は。似。げ。る。ハ。一。歳
 こそ。も。歳。を。懸。して。弱。り。と。人。を。思。ひ。れ。ん。と。を。親。を。通。て。女子。の。情
 を。る。に。然。い。あ。て。父。が。強。意。を。を。せ。し。山。岩。瀑。も。孝。順。を。似。れ。ども。
 侶。ふ。酷。く。人。情。不。戻。り。と。皆。あ。れ。利。欲。の。小。人。ある。ふ。干。圈。套。ふ。掛。られ。
 義。仍。の。罪。ね。た。ふ。似。れ。ども。異。日。ふ。禍。を。免。せ。ば。亦。も。自。ら。みる。所。あり。て。
 老。く。色。を。好。む。者。以。て。戒。と。と。た。た。の。も。途。が。般。石。瀑。の。標。致。の。妖。艶。ある。の。も
 ち。あ。ら。で。ふ。才。も。慧。心。く。逞。し。か。り。な。れ。ば。敢。て。馬。脚。を。露。さ。ば。義。仍。を。敬。あ。く
 表。裏。あ。く。仕。へ。娼。け。め。僑。居。が。う。ふ。よ。く。家。変。を。修。め。て。庖。俾。の。指。揮。を
 ども。脱。落。あ。く。幫。助。と。あ。ら。と。と。多。かり。け。む。バ。義。仍。が。鐘。愛。目。ふ。深。く。け
 派。初。め。義。仍。が。僑。居。の。ハ。只。若。黨。草。鞋。奴。の。両。名。を。役。使。し。山。岩。瀑。を。侍
 女。と。し。る。こ。ゆ。て。新。小。炊。婢。を。常。央。し。ら。ば。一。家。鬼。中。熱。鬧。て。ぞ。賞。あ。る。わ。ど

小人を増バ水も増つふ。鄙諺の若く没女も特とふ。若れども。辰湯の
 開頭の掛念せに。殆旅情を。忘る許は。樂を取て。虚々と。都は。陰に
 陽を鎖す。有は。係に任心て。あま。死よ。何ら。げれ。ば。臆く。炊火。婢は。の。暇を
 を。多く。せ。暮暮。若若。瀑と。若若。堂堂。隸隸。奴を。召喚。一と。ム。歳の。五月。小丹。波を
 比如。江の。宿所。へ。歸り。有之。程に。辰湯。が。才を。左馬。權允。義順
 此番。の。為体。を。他所。に。移す。一は。所も。あら。又今。見ゆ。つれ。ば。眉を。擧げ
 めて。何ら。げれ。がも。と。思ふ。几自。然さ。がも。嫂を。世を。去り。あひ。後の。然ら
 こそ。萬は。便り。あら。心細。く。も。思ふ。一は。ん。記目。の。幫助。一個。の。妻を。去ら。れ
 一と。と。觀面。て。緯も。多き。を。尚云。々と。兄を。對ひ。て。論ぜ。ん。ハ。賢才。能い
 悱順。の。道を。失ひ。人情。を。得知。らば。海と。車を。好む。れば。似て。て。も
 要を。一里。鳥居。の。比賀。江と。屋梁。を。別て。固是。一家。の。あら。れば
 侄女。猶子。の。船此。与た。緯あ。は。這方。へ。喚も。あら。て。育ん。ハ。俺本。意を
 一は。ハ。大哥。の。意を。悱ら。て。ム。一生。涯を。婚め。まら。るら。ば。不若。と。雪松
 一は。情々。地は。這由。を。會意。はせ。然る。氣を。ぞら。過ぬ。るら。不具。形を
 一は。あら。年許。終る。と。新月。ハ。既に。二五。の。傍の。天の。生涯。廉質。良衣
 一は。透る。肌の。清く。あら。玉を。欺ら。うら。笑ぎ。て。温る。親の。音教。あら。ハ
 一は。蒼蒼。花は。春風。に。綻び。初ん。と。あら。氣を。空華。めら。て。堆れ。雪の中。ハ
 一は。香を。送る。梅は。あら。若若。梅と。いん。他日。の。色香。を。思ひ。果ら。れて。岩瀑
 一は。然も。容止。醜く。ねも。倒ゆ。玉。氷。の。自然。あら。差別。あら。ふん。が才。も
 一は。大方。形は。勝た。るら。岩瀑。ハ。情小。愛醋。一は。女の。み形。は久。後後。鬱悒
 一は。の。形は。争何。這奴。を。遠け。ん。と。獨り。心は。計較。りは。うら。諛言。忘さ。き
 一は。破隙。を。れば。有一。夕義。仍い。ひら。中う。新月。小姐。の。器用。は。所産。まら。せ。

示^し。厥^の后^は老^れ実^しう^て執^る事^を。若^し當^ら黨^の隸^は奴^に一^は兩^名を^を京^へき^りて^て新^し
 月^の消^し息^を。衣^の服^を調^へ度^を何^れの^の東^西を^を賭^りて^て賭^は終^る事^を。今^の番^をと^り
 の^の路^をと^りて^て後^を来^まず^も屢^く音^を絶^つを^を却^て説^き義^順の^の二^日許^を
 過^て。兄^を及^つ湯^をと^り訪^ひし^し。源^二郎^一の^の父^の側^を来^て叔^父を^を拜^せり^を
 義^順胡^意新^月が^のん^えば^のい^はな^し何^れの^の什^物を^をせ^りや^と索^ふふ^ふ義^順の^の遠^く
 の^の出^る。喃^左馬^先告^も後^れて^て面^をな^れど^乃者^をん^がん^が新^月が^のみ^や
 仕^をを^を禁^めり^し。俺^は左^右新^月が^の快^く都^のの^の子^態を^をん^せま^はり^し
 思^ふ心^の止^難だ^よ。何^れ某^の臣^相の^の所^館に^は通^信を^をん^せま^はり^し
 難^だ事^をあり^しと^と急^ぎ都^へ急^ぎせ^りい^はな^しの^の日^{あり}が^の縁^の紛^れ思^ふ
 づも^のん^がん^が告^も報^せら^うし^しと^と脱^落を^をり^しと^と昨^今悔^れど^甲斐^もる^る
 此^れの^の故^{から}畢^竟竟^も子^を我^に任^せし^しと^と任^情を^をり^しと^と該^める^るを^をん^せま^はり^し

くと^の思^ひそ^と生^平の^の性^ふ似^づり^し。辭^の端^の怪^れを^を義^順思^ふ所^由
 あり^し復^たは^らし^し訝^る色^をを^を只^し聽^然の^の情^由を^をん^せま^はり^し。姪^女の^の親^子
 の^の間^にて^て理^會を^をん^せま^はり^し。知^れや^と與^られ^し。ん^がの^の本^意を^をん^せま^はり^し
 と^と叮^け。詎^が兎^角稟^上と^と術^よも^も柔^受詞^は義^順を^をん^せま^はり^し。も^も大^志を^を
 義^娘は^らは^ら吩^咐て^て酒^館を^を運^び出^して^て隔^をり^し。譚^ひ。機^嫌を^を
 候^ひ義^順は^ら父^司馬^介義^則が^の在^世。耐^ムが^の目^前に^て盟^ひる^る約^をの^のい^ひ
 出^し。今^の日^の黄^道吉^日なり^し。年^何源^二郎^一を^を在^下。賜^ふべ^しと^と諺^ひ。義^順
 仍^も其^の誠^をを^を諾^しむ^る。義^順歎^び改^めて^て盃^を源^二郎^一に^に執^らせ^て父^の
 子^の義^をを^を結^び。千^秋萬^福を^を唱^へぬ^れ却^て義^順侍^て兄^に對^ひ。既^に
 源^二郎^一を^を稟^請て^てい^はら^し親^を在^下。膝^下に^て義^順を^を教^育す^るを^をん^せま^はり^し
 推^し。傳^へん^がん^が義^順の^の志^をを^をん^せま^はり^し。ん^がの^の志^をを^をん^せま^はり^し。乃^者新^月

都ふ上せし。那れきま。這置は在だ。あつ。猛人。新ゆあて。俺心寂し。は
 をきさる。あつ。且おん。逆知る。俺年毎。一番丹後の外宮内官。
 及び切渡の文珠井と成相寺の親音菩薩埴。詣拜む。こと久かり。あつ。六
 竹がせを去。後左右。障礙ありて。既。二年。許わ。うち。絶ぬ。本。あつ。ぬ
 りのから。五十。途。死。老。の。あつ。れ。今。より。源。二。郎。を。俺。は。代。ら。せ。三。年。の。あつ。を
 陪説。奉。り。て。あつ。償。は。月。毎。は。詣。ま。ぬ。と。あつ。香。も。願。あ。た。ぬ。任。心。由。も
 あつ。六。權。且。ま。方。は。錯。私。緊。要。の。緯。五。は。何。日。も。あつ。ぬ。方。へ。喚。り。神。の
 や。義。順。會。笑。て。月。次。丹。後。詣。ま。せん。と。い。俺。方。は。在。も。難。く。も。あつ。私
 ど。家。兄。の。然。思。い。あつ。今。權。且。が。向。ハ。源。二。郎。を。代。け。ま。ぬ。と。あつ。躬。て。別
 て。帰。ら。ぬ。必。竟。見。牧。野。兄。分。が。う。へ。は。あつ。怎。あ。つ。説。話。が。あ。つ。ハ。次。の。卷。小。叙。ん。
 復讐言山右見英雄録第五輯卷之四 終

